

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03317

研究課題名（和文）大学院生の専門家アイデンティティの形成に関する臨床心理学的研究

研究課題名（英文）A clinical psychological study on professional identity development of graduate students

研究代表者

黄 正国（Huang, Zhengguo）

九州大学・留学生センター・准教授

研究者番号：80735275

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本の大学院生の専門家アイデンティティの形成に焦点を当て、大学院生の心理発達の特徴と支援のあり方を検討した。面接調査を通じて、専門家アイデンティティの構成要素と関連要因を質的に分析し、次に専門家アイデンティティと関連要因を測定する尺度を開発、信頼性と妥当性を検討した。さらに、専門家アイデンティティ形成のプロセスを解明し、支援プログラムの効果を実証した。その結果、大学院生の専門家アイデンティティと関連要因を測定する尺度の開発に成功し、時間軸に沿った専門家アイデンティティ形成のプロセスモデルを構築、支援プログラムの有効性を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、大学院生の心理発達の特徴に焦点を当て、専門家アイデンティティの構成概念や関連要因を明らかにした。大学院生の専門家アイデンティティ形成は特定の研究者コミュニティの価値観を学び内面化する過程であることが示唆された。また、その関連要因を測定する尺度を開発し、信頼性と妥当性を確認した。さらに、時間軸に沿った専門家アイデンティティ形成のプロセスモデルを構築し、自己に関する物語を形成する認知過程と専門家アイデンティティ形成の関連を明らかにした。これらの知見に基づく支援プログラムの効果が実証され、大学院生の適応とキャリア形成への支援に貢献することが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on forming professional identity among Japanese graduate students, examining their psychological developmental characteristics and the ways to support them. The components and related factors of professional identity were qualitatively analyzed through interviews. Subsequently, scales to measure professional identity and its associated factors were developed, and their reliability and validity were examined. Furthermore, the process of professional identity formation was elucidated, a support program was devised, and its effectiveness was tested. As a result, the study succeeded in developing scales to measure professional identity and its related factors among graduate students, constructing a process model of professional identity formation along a timeline, and confirming the effectiveness of the support program.

研究分野：社会科学

キーワード：専門家アイデンティティ 大学院生 心理発達 学生相談 キャリア支援

1. 研究開始当初の背景

1990年代から大学院重点化事業が推進され、大学院在学者数は継続的に増加した。平成28年5月1日時点で全国の大学院在学者(修士課程、博士課程、専門職学位課程を含む)数は249,588人であった(文部科学省, 2016)。特に理系については、学部の4年間に修士の2年間を加えた「6年間大学」に進学するという考え方が浸透している。しかし、「進学が当たり前」「就職に有利」などの理由で進学する大学生も多く、大学院を学部の延長期間と捉える考えが根強い。このような背景もあり、日本の大学院生の心理発達のな特徴について、学部生と明確に区別した研究は見当たらない。一方、海外の研究では、大学院生が学部生とは明らかに異なる体験をしていると主張し、盛んに研究が行われている(Trede, Macklin, & Bridges, 2011)。

特に、大学院生の「研究者」あるいは「専門職」としての専門家アイデンティティの形成に関する研究が極めて重要と指摘されている(Tomlinson & Jackson, 2019)。専門家アイデンティティとは、属性、信念、価値観、動機、および経験に基づく職業上の自己概念であり、専門資格あるいは技能を有する職業集団のもつ規範や価値体系との相互作用の中で自覚される主観的な感覚である(宮下他, 1984; Ibarra, 1999; Schein, 1978)。大学院生の専門家アイデンティティの形成は発達するプロセスであり、教育や訓練の効果、キャリア選択と目標設定、研究活動への満足度、自己効力感、心理的ウェルビーイングとの間に関連があることが実証されている。また、関連要因として、周囲からの支援を感じている学生、特に信頼され守られていると感じている学生の専門家アイデンティティが高いことが報告されている。理想と現実の不一致の状況では、専門家アイデンティティの形成が阻害される(Trede, Macklin, & Bridges, 2011)。

Gardner (2009)の研究では、大学院生の発達過程を入門期、成熟期、独立期に分けて、各段階における専門家アイデンティティ形成の重要性を唱えた。専門家アイデンティティの形成は、研究コミュニティへの所属感、研究へのモチベーション、対人コミュニケーション力、自己管理能力、課題解決能力と強く関連しているとされている(Gardner & Barker, 2015)。また、Kidwell & Flagg (2004)の研究では、博士後期課程に進学した大学院生の多くが修士課程の1年目の早い時期に博士後期課程への進学を決意していたと報告され、修士課程に進学した直後から専門家アイデンティティの形成に関する支援を行うことが重要とされている。実際に、日本では博士後期課程で、研究活動以外に所属研究機関(研究室)の運営業務や学会での活動などを並行して行う必要がある。このような様々な課題をこなしながら博士号を取得しキャリアを形成するためには、修士課程の早い時期から段階的に専門家アイデンティティを形成することがきわめて重要であると考えられる。

日本の先行研究においては、医療職や伝統工芸職人などの特殊領域における専門家アイデンティティに関する研究は散見される(前田, 2009; 岡本, 2010; 神谷他, 2012など)。一方で、研究者あるいは専門職を目指す大学院生を対象とした研究は見当たらず、大学院生の専門家アイデンティティ形成の過程は未だ明らかになっていない。また、専門家アイデンティティ形成への具体的な支援方法及び評価尺度に関する実証的研究も行われていない。大学院生が在学期間を有効に利用して研究成果を生み出し、自らのキャリアを形成することを支援するためには、発達臨床心理学の視点から大学院生の専門家アイデンティティ形成の過程を明らかにし、効果的に測定できるツールを開発することが喫緊の課題である。

2. 研究の目的

先行研究の問題点として、長期的追跡の不足、定義と測定の一貫性の欠如が挙げられる。そこで、本研究では、大学院生の専門家アイデンティティの形成過程に焦点を当て、その関連要因、評価方法および支援方法を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の3点を明らかにする。大学院生の専門家アイデンティティ形成はどのような過程を経るか。大学院生の専門家アイデンティティの形成に影響を与える要因とは何か。どのようなアセスメント尺度と支援方法が有効か。

3. 研究の方法

(1) 大学院生の研究活動は、不確実性に富んだ動的で開放的な営みであり、あらかじめ決まったステップで必ずしも進行せず、個人によって進捗状況と体験が異なっている。専門家アイデンティティの形成の状態とその関連要因を多元的で包括的に評価するために、以下の調査を行った。

大学院生の専門家アイデンティティ形成過程における危機、課題、阻害要因、促進要因を明らかにするために、博士課程前期と後期の大学院生計18名を対象に面接調査を行った。

面接調査の結果を踏まえて、大学院生の専門家アイデンティティ形成の状態を測定する尺度と、専門家アイデンティティ形成の関連要因(阻害要因と促進要因)を測定する尺度の項目を選出した。同意が得られた大学院生223名を調査対象に、郵送法で無記名自記式質問紙調査を実施し、尺度の信頼性と妥当性を検討した。

(2) 大学院生の専門家アイデンティティ形成の過程は、内的側面と外的環境の側面の要因に複

雑に影響を受けている。多次元からの支援アプローチを検討するために、以下の研究を行った。

調査研究の結果を踏まえて、大学院生の専門家アイデンティティ形成の各段階(入門期、成熟期、独立期)における支援プログラムを考案・実施し、その効果を検討した。同意が得られた大学院生 38 名を介入群と統制群に無作為に割り当て、介入群(19名)に対して支援プログラム(心理教育:60分の集団実施×1回、情報提供:60分のグループワーク×1回、個別相談支援40分×3回)を行い、支援効果を検討した。

大学院生 15 名を対象に支援プログラム(心理教育:60分×1回、情報提供:60分×1回、個別相談支援40分×3回)を行った。毎回の介入の後にデブスインタビュー(60分)を通して個別にデータを収集し、テキストマイニングを通して専門家アイデンティティ尺度得点の高い群と低い群における語りの違いを分析し、大学院在学中の時間軸に沿った専門家アイデンティティの形成プロセスを検討した。

一時期に専門家アイデンティティ形成において困難に直面していた大学院生 6 名を対象に、2週間ごとに面接調査(60分×5回)を実施し、専門家アイデンティティを構築する過程でさまざまな出来事に遭遇した際の認知処理パターンを検討した。

4. 研究成果

(1) 大学院生の専門家アイデンティティの構成概念、促進要因、阻害要因について

面接調査の結果から、大学院生の専門家アイデンティティの形成を「特定の専門家コミュニティの価値観や規範を内面化し、自分の中で機能させることを学習する過程」と捉えることができると示唆された。専門家アイデンティティの概念の構成要素について、「専門的知識とスキル」、「批判的思考」などの個人の能力的側面に加えて、「専門家コミュニティとの関係」、「他者からの肯定」、「研究の価値と意味への確信」、「研究能力に対する自信」、「身分と役割への同一化」、「個人の目標設定」、「コストと報酬への承認」のカテゴリが挙げられた。また、専門家アイデンティティ形成の阻害要因と促進要因については、「指導教員および周囲の研究者との関係」、「期待される成果」、「キャリア目標」のカテゴリが現在の活動と将来の人生との一貫性を実感するために重要な要素であることが明らかになった。大学院生は、短い在学期間に特定の専門領域について主体的に勉強し、研究活動やキャリア設計を完結しなければならないため、早期に所属している専門領域の伝統と文化を身につけ、研究コミュニティの一員としての役割と責任を自分の中に取り入れて研究活動に取り組んでいく必要があることが示唆された。

(2) 大学院生の専門家アイデンティティ、促進要因、阻害要因の測定尺度について

質問紙調査の結果から、専門家アイデンティティ尺度は、「内的動機」、「主体的行動」、「知的な喜び体験」、「専門家コミュニティ感覚」の4因子が得られた。促進要因尺度は、「指導教員による肯定と励まし」、「安心して相談できる人の存在」、「研究の価値と意義への確信」、「研究成果が認められた体験」、「家族の理解と支援」の5因子が得られた。阻害要因尺度は、「情報と資源の不足」、「人間関係のトラブル」、「研究テーマへの迷い」、「進路への不安」、「過重な役割による負担」、「経済的な困難」、「研究成果に関する焦り」、「心身の疲労」の8因子が得られた。それぞれ信頼性と妥当性が確認された。また、自由記述の結果から、大学院生は比較的狭い人間関係のネットワークの中で忙しい研究活動を行っているため、研究コミュニティへの帰属感、円滑なコミュニケーション、良好な人間関係は特に環境要因として重要であることが示唆された。

(3) 大学院生の専門家アイデンティティ形成を支援する心理教育プログラムについて

大学院生の専門家アイデンティティ形成促進についての支援の有効性が実証された。大学院生を対象に行った支援プログラムの直後は、専門家アイデンティティ形成促進要因が改善され、阻害要因尺度の得点が軽減されたことから、支援プログラムの効果が見られた。その効果は一か月後のフォローアップテストでも確認された。また、大学院生の専門家アイデンティティ尺度の得点によって、個別相談支援の中で現れた話題が異なっていた。専門家アイデンティティ尺度の得点が高い学生は、研究成果を得るために、体調管理、効率改善、コミュニケーション力の向上に関する相談が多かったのに対し、専門家アイデンティティ尺度の低い学生の場合、現在の適応状況の改善とともに、別のキャリアへの模索についての相談内容が多かった。予防的な心理教育に加えて、大学院生の多様なニーズに応えられる相談支援が必要であることが明らかになった。

(4) 大学院生の専門家アイデンティティ形成のプロセスモデルについて

ケーススタディを通して、大学院在学中の時間軸に沿って個人の専門家アイデンティティ形成のプロセスモデルを構築した。「安定した人間関係」、「帰属感」が入学初期の専門家アイデンティティの構成要素、「使命感」、「自己効力感」が研究に専念する時期の専門家アイデンティティの構成要素、「主体性」、「満足感」が修了前の専門家アイデンティティの構成要素であることが示唆された。このモデルに基づいて、専門家アイデンティティの形成に困難を抱える大学院生の問題をより精密にアセスメントできるようになり、大学院生の適応やキャリア形成に関する相談支援に活用できると考えられる。

(5) 大学院生の自伝的推論と専門家アイデンティティ形成の関連について

人間関係の葛藤や自己矛盾の心理状態に置かれても、常に自分の気持ちや出来事を再認識し、様々な情景における自己を統一して、現在の自分に最も整合する人生の物語を形成する認知過程は自伝的推論と呼ばれる(Pasupathi, Mansour, & Brubaker, 2007)。今回の研究では、高度な専門家アイデンティティを持つ大学院生は、負の出来事による影響を客観的に評価し、過去の自分および未来の自分のイメージが容易に動揺しないことが明らかになった。同時に、他人の視

点を取り入れ学び続けることができ、様々な複雑な経験を統一して安定した自己を構築しながらも、再構築を繰り返して成長し続けている。一方で、専門家アイデンティティ尺度の得点が低い大学院生は、負の出来事を自己叙述の中心に据え、環境要因が自分に与える影響を強調する傾向がある。指導教授に過度に従属、依存するとともに、研究の進行を妨げる要因に対して非常に敏感で、目の前の困難からポジティブな意味を見出すことが難しい。

(6) 本研究課題の全体を通して

上述した本研究課題によって明らかになった知見はいずれも発表するために投稿準備中である(一部はすでに公刊済み)。本研究課題は一貫して、大学院生の専門家アイデンティティに焦点を当て、その関連要因と支援の方法について検討してきた。その結果、大学院生の専門家アイデンティティの構築過程は、過去の自分、現在の自分、そして未来の自分に関する統合を行い、最終的に一貫性と整合性を持った職業に関する物語を形成するプロセスであることが明らかになった。大学院生にとって、専門家アイデンティティは成熟した社会的自己分化を示し、継続的な動機付けと職業に対する積極性を保持することに寄与することが示唆された。そして、関連要因として、個人の能力面の要因、環境面の要因、認知面の要因などが特定され、今後の大学院生への心理的支援の在り方を考えていく際に重要な知見が得られた。

一方で、今回の研究では、大学院教育の問題点も示唆された。例えば、業績主義の風潮によって周囲から過剰なプレッシャーをかけられて、メンタルヘルスの問題を抱える大学院生も少なくない。また、自分のやりたいことを指導教員に明確に示せず、与えられた役割に縛られて、個人の創造性が阻害され、研究活動への動機が低下しバーンアウトする大学院生もいる。今後は、上述した問題点に対処するために、大学院生の専門家アイデンティティ形成過程に基づいて、周囲とのコミュニケーションと主体的な行動をサポートする実践的研究を進めていくことが必要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Tomoko Takegishi, Noriko Yamamoto, Naoki Hirabayashi, Suguru Hasuzawa, Masahide Koda, Zhengguo Huang, Na Li, Hisae Matsuo and Takeshi Sato	4. 巻 20(11)
2. 論文標題 Comparison of Illness Behavior between Japanese and Chinese Patients with Somatoform Disorders	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian Journal of Medicine and Health	6. 最初と最後の頁 81-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡本百合・黄 正国	4. 巻 58(2)
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染拡大と大学メンタルヘルス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黄 正国・磯部典子・高垣耕企・野瀬祥代・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・香川英美・矢式寿子・吉原正治	4. 巻 58(1)
2. 論文標題 大学院生の心理的適応に関する予備的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 158-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本百合・三宅典恵・香川英美・磯部典子・黄 正国・高垣耕企・吉原正治	4. 巻 36
2. 論文標題 摂食障害学生の適応状況と進路について：自閉症スペクトラム特性を背景に持つ学生の困難	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 総合保健科学	6. 最初と最後の頁 1 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部典子・岡本百合・黄 正国・三宅典恵・高垣耕企・香川英美・野瀬祥代・二本松美里・矢式寿子・吉原正治	4. 巻 57
2. 論文標題 大学における心理・メンタルヘルス教育 教養教育授業「学生生活概論」での取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 273-275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本百合・三宅典恵・香川英美・矢式寿子・磯部典子・黄 正国・高垣耕企・野瀬祥代・二本松美里・吉原正治	4. 巻 57
2. 論文標題 大学生の過食行動：コホート調査より	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 268-269
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三宅典恵・岡本百合・香川英美・矢式寿子・磯部典子・黄 正国・高垣耕企・野瀬祥代・二本松美里・吉原正治	4. 巻 57
2. 論文標題 大学生の摂食態度や抑うつ傾向の変化に関する検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黄 正国・小澤郁美・石田貴洋・野口由華・川崎のぞみ・阿部祐也・石山奈菜美・高垣耕企	4. 巻 35
2. 論文標題 大学院新入生を対象としたサポートグループによる支援の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 総合保健科学	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本百合・三宅典恵・矢式寿子・磯部典子・黄 正国・高垣耕企・野瀬祥代・二本松美里・日山 亨・吉原正治	4. 巻 56
2. 論文標題 自閉症スペクトラム特性を持つ大学生のメンタルヘルス：男女の比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 414
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部典子・岡本百合・日山 亨・三宅典恵・黄 正国・高垣耕企・野瀬祥代・吉原正治	4. 巻 56
2. 論文標題 学生相談・メンタルヘルス研修における工夫	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 313-314
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日山 亨・岡本百合・黄 正国・磯部典子・吉原正治	4. 巻 56
2. 論文標題 学部新生を対象とした教養教育科目「大学教育入門」での健康教育	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 175-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗田智未・内野悌司・小島奈々恵・黄 正国・大島啓利	4. 巻 3
2. 論文標題 大学生が困っていること及び関連する心理的要因 日本人大学生のインターパーソナルな問題について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 健康科学研究	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 黄 正国
2. 発表標題 Feedback Informed Treatmentを用いた大学院生支援
3. 学会等名 日本学生相談学会第39回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯部典子・黄 正国・高垣耕企・野瀬祥代・二本松美里・岡本百合
2. 発表標題 コロナ禍でのメンタルヘルス啓発活動と学生アンケート調査から見た課題
3. 学会等名 第59回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西川大志・猪上優子・黄 正国・佐藤優子・今田直樹・荒木勇人・荒木 攻
2. 発表標題 回復期病棟の脳梗塞患者の心理状態変動と心のケアの有効性について
3. 学会等名 第24回日本臨床脳神経外科学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Huang Zhengguo
2. 発表標題 The long-term psychological impact of the novel coronavirus pandemic on university students
3. 学会等名 The 13th International Congress of Post-Disaster Psychological Aid and Trauma Interventions in Asia (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 黄 正国
2. 発表標題 自傷経験のある大学生のセルフトークの特徴
3. 学会等名 日本学生相談学会第38回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黄 正国、磯部典子、高垣耕企、野瀬祥代、二本松美里、岡本百合、三宅典恵、香川芙美、矢式寿子、吉原正治
2. 発表標題 大学院生の心理的適応に関する予備的研究
3. 学会等名 第58回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黄正国
2. 発表標題 大学院生の心理的苦悩と支援を考える
3. 学会等名 第53回全国学生相談研究会議 有馬シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黄 正国
2. 発表標題 多文化共生の視点を取り入れた学生相談実践の一事例
3. 学会等名 第46回中国四国学生相談研究会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 李 娜・黄 正国
2. 発表標題 中国延辺朝鮮族集住地域の中学生の継承語意識についての考察
3. 学会等名 第6回日本語・日本文化国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 HUANG Zhengguo
2. 発表標題 Psychological care for cancer patients
3. 学会等名 The 12th International Congress of Post-Disaster Psychological Aid and Trauma Interventions in Asia（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三宅典恵・岡本百合・香川芙美・矢式寿子・磯部典子・黄 正国・高垣耕企・野瀬祥代・吉原正治
2. 発表標題 大学生の摂食態度や抑うつ傾向の変化に関する検討
3. 学会等名 第57回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯部典子・岡本百合・黄 正国・三宅典恵・高垣耕企・香川芙美・野瀬祥代・二本松美里・矢式寿子・吉原正治
2. 発表標題 大学における心理・メンタルヘルス教育 教養教育授業「学生生活概論」での取り組み
3. 学会等名 第57回全国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小澤郁美・黄 正国
2. 発表標題 大学院新入生を対象とした学内開放型グループ交流活動への参加がコミュニティ感覚や気分状態に及ぼす効果の再検討 大学院新入生交流会の試みとその効果(3)
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黄 正国・高垣耕企・磯部典子・野瀬祥代・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・香川芙美・矢式寿子・吉原正治
2. 発表標題 ピアサポート活動に参加した大学生の心理的体験に関する質的分析
3. 学会等名 第49回中国四国大学保健管理研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 HUANG Zhengguo
2. 発表標題 Experience and psychosocial issues in stroke patients
3. 学会等名 The 11th International Congress of Post-Disaster Psychological Aid and Trauma Interventions in Asia(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黄 正国
2. 発表標題 親子関係におけるトラウマ体験を抱えた大学生への心理発達支援
3. 学会等名 日本心理臨床学会第38回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 黄 正国（共著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 231
3. 書名 経験の語りを読む－人生の危機の心理学（岡本祐子編著）	

1. 著者名 黄 正国（共著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 花書院	5. 総ページ数 199
3. 書名 学生相談の広がりや深まり（吉良安之/高松里編集）	

1. 著者名 黄 正国（共著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 佐賀新聞社	5. 総ページ数 147
3. 書名 人間みな違うはずですが？ コリアン編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------